

派遣者番号	R 6 K 1 1	氏 名	今 正太
研究主題 —副主題—	特別支援学級（固定・知的）における教科指導について —国語科の指導と特別な教育課程—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	奥住 秀之
所属	中央区立月島第一小学校	所属長	藤山 由仁

キーワード：特別支援学級、知的障害、教科指導

要旨： 知的障害特別支援学級における教科指導の困難さを明らかにし、具体的な授業改善方法を提案することを目的としている。調査 1 では、東京都 23 区内の特別支援学級担任を対象にしたアンケート調査により、児童の実態差が大きく、教材や指導形態に困難が生じていることが判明した。調査 2 では、特別支援学級の国語科の授業実践を通じて「授業のモデル化」「一斉指導の中での個別最適な学び」「協働的な学び」を検証。結果、教材の学習効果や協働的な学びの必要性が評価された一方、教員の負担や児童間の学びの偏りが課題とされた。多様な児童の実態に対応するため、指導研究の深化と支援環境の整備が求められると結論付けられた。

I 問題と目的

1 これからの教員に求められる特別支援教育の専門性

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して「～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」では、小中学校における多様な学びの場の一層の充実・整備や、必要な指導体制等について検討する必要があると述べられている。また、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議(報告)」において、採用後 10 年目までに特別支援教育の専門性を高めることが推奨された。以上のように、全ての教員に特別支援教育の専門性の向上が求められている。

2 知的障害特別支援学級における教科指導の課題

知的障害特別支援学級の教科指導においては、児童の実態に合わせた教材の作成・選択や、一斉指導及び個別指導の指導形態に大きな困難が生じていると考える。しかしながら、教科指導における困難の実態について具体的に検討された研究は少ない。河村(2018)は、知的障害特別支援学級において、授業で使用する教材や、指導形態について調査した。教材について最も多かったのは、ドリル・ワークであり、指導形態として最も多かったのは、一斉指導であった。プリントやドリル・ワーク学習を中心とした指導が行われることは少なくないが、一斉指導の指導形態が多いという点にはやや疑問が残る。知的障害特別支援学級における教科指導の実態は個別指導と個に配慮しない一斉指導のどちらかに偏っているというのが現場における体感である。

3 本研究の目的

本研究では、東京都 23 区内知的障害特別支援学級担任を対象に、知的障害特別支援学級担任が直面している困難さの実態について明らかにすることを目的とする。教科は国語科とし、特別な教育課程での内容や、教材、直面している困難さについてアンケート調査を行い検討する。また、国語科の実践授業を通して授業のモデル化を行い、授業改善の具体的な方法について提案し、その効果を検証する。

II 検討 1 東京都知的障害特別支援学級における教科指導の実態調査

1 目的

東京都知的障害特別支援学級における教科指導の実態調査を行い、知的障害特別支援学級での教科指導における困難さについて明らかにすることを目的とする。

2 方法

(1) 対象

東京都 23 区内知的障害特別支援学級 210 校に送付し、68 校より 94 件の回答を得た。

(2) 方法

郵送によってアンケート調査の依頼書を送付し、Web アンケートによって回答を回収した。

(3) 内容

ア 基礎データ イ 国語科の指導実態 ウ 困難さ

3 結果

(1) 有効回答数について

得られた回答数は、94 であった。1 校 1 回答を想定していたが、同校から複数人の回答があったため、調査内容によって有効回答を変動させた。

(2) 基礎データ

表 1 基礎データ		有効回答数 68
	平均	SD
学級数	3. 54	1. 25
在籍児童数(人)	25. 15	8. 87

表 2 教育課程の編成方法		有効回答数 78	
		回答数	割合
小学校学習指導要領を中心に、特別支援学校学習指導要領を参照		50	64. 1%
特別支援学校学習指導要領を中心に、小学校学習指導要領を参照		26	33. 3%
特別支援学校学習指導要領のみを参照		1	1. 3%
不明（基本的に昨年度作成のものを中心に編成している）		1	1. 3%

(3) 国語科の指導実態

有効回答数 91

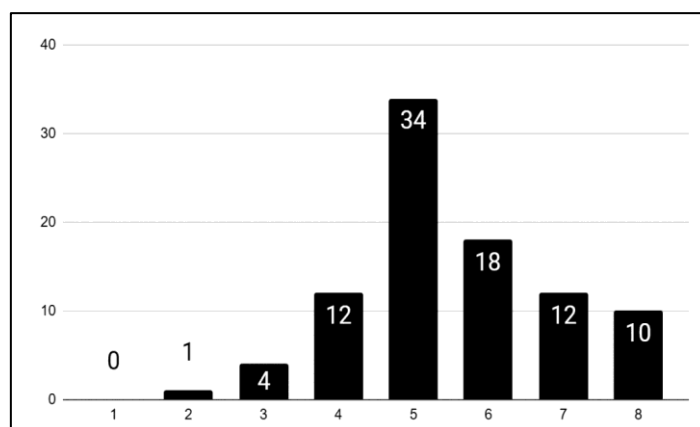
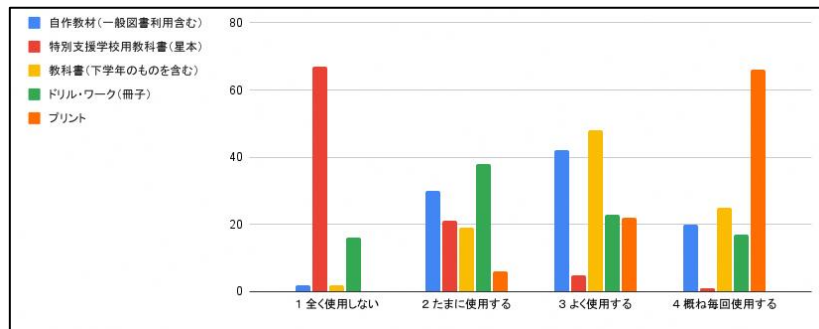
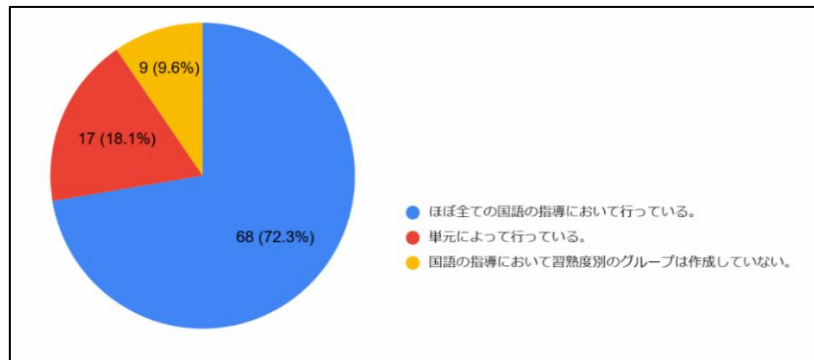


図 1 週当たりの国語の指導時数



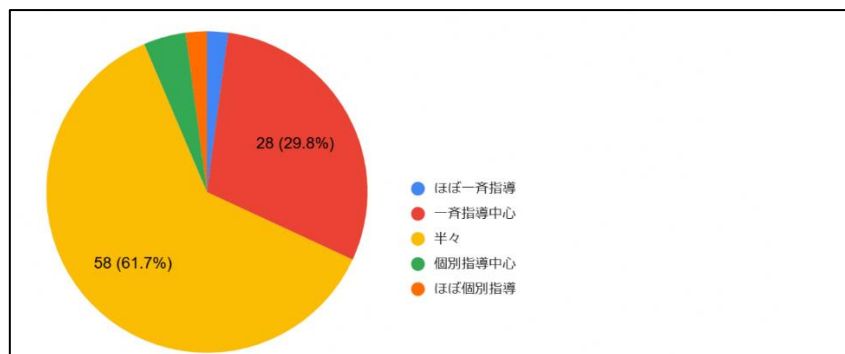
有効回答数 94

図2 使用教材



有効回答数 94

図3 国語科の指導における習熟度別の指導実施状況



有効回答数 94

図4 国語科の指導における指導形態

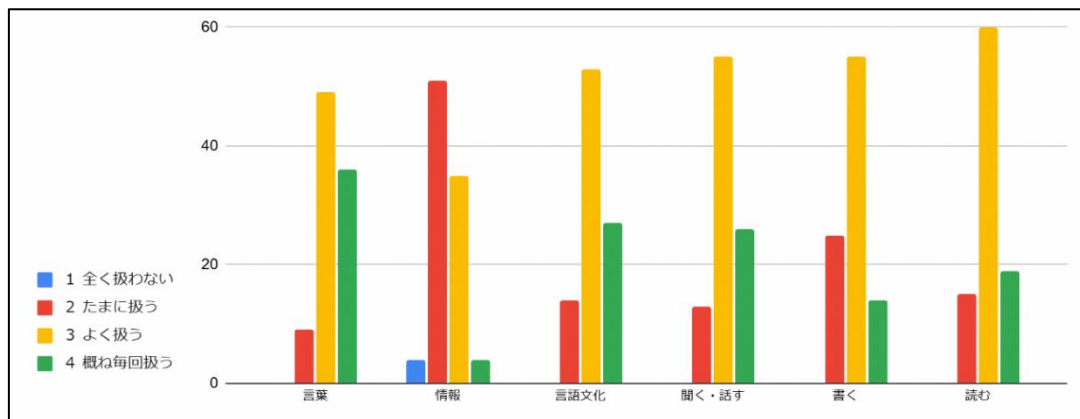


図5 国語科の指導内容

有効回答数 94

(4) 困難さ

有効回答数 94

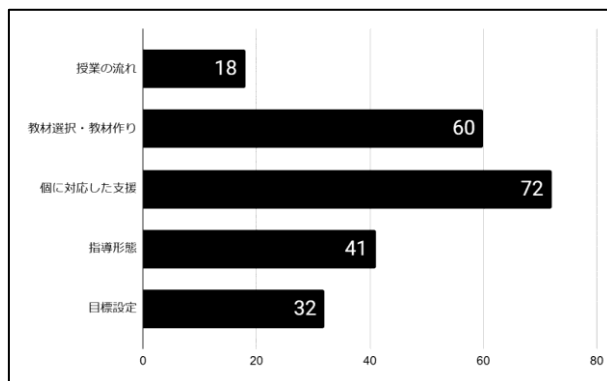


図6 特別支援学級での教科指導における困難さ

表3 各困難さにおける理由

授業の流れ		教材作り・教材選び		個に対応した支援	
児童の実態差	7	教材の選定	21	児童の実態差	42
一斉指導の困難さ	5	個別対応の教材作成	15	一斉指導における個への対応	7
指導内容の策定	3	教材準備にかかる時間	12	個別指導時間が不足	5
通常学級との差異	3			人員が不足	4
指導形態		目標設定			
習熟度別指導グループ内の実態差	8	個別の目標設定	4		
一斉指導の困難さ	7	目標に応じた指導	3		
習熟度別の指導の困難さ	5	目標の妥当性	3		
個別指導の困難さ	3				
一斉指導と個別指導のバランス	2				

4 考察

(1) 特別な教育課程と児童の実態

文部科学省では、特別支援学級の特別な教育課程は小学校の学習指導要領を中心とした編成が望まれている。本調査により、特別な教育課程の編成においては、3割以上の学級で特別支援学校学習指導要領を中心に作成されていることが分かった(表2)。この要因として考えられるのは児童の実態の多様化である。特別支援学級の指導についていくことが難しい児童に対して適切な内容を包含する教育課程を編成する必要があるということが要因となっていると考えられる。

(2) 国語科における情報の扱い方に関する事項の指導の困難さ

国語科の指導内容について、情報の扱い方に関する指導事項が突出して扱われに

くということが分かった。この内容は小学部3段階から初めて取り扱われる内容であり、求められる力も高いことから、取り扱われにくいことが考えられる。一方、国語科の時間にはひらがなや漢字、言葉の学習に特化したものや、読書活動の時間が含まれていると考えられる。情報の扱い方に関する直接的な内容の取扱いは少ないものの、系統性のある指導は行われているだろうかと考えられる。

(3) 教材における困難さ

特別支援学級での教科指導における困難さ(図6)では、教材における困難さとして、「教材の選定」、「個別対応の教材作成」、「教材準備にかかる時間」の3つの要素について多く共通していた。「教材の選定」は、通常学級での指導には基本的にない視点であることが難しさの要因であると考えられる。「個別対応の教材作成」は、児童の実態差が大きいことが要因であると考えられる。「教材準備にかかる時間」は、上記の理由により負担感が大きいことは明らかである。その他に時間がかかる理由として、教員の経験不足が挙げられる。

(4) 指導形態における困難さ

国語科の指導における指導形態(図4)では、一斉指導と個別指導をおよそ半々の割合で行っている学級が最も多かった。特徴的なのは、一斉指導にも個別指導にもそれぞれ困難さがみられることである。一斉指導では、授業に参加できない児童や、学習についていくことが難しい児童の対応が困難を生じているという回答が多かった。個別指導の困難では、児童数が多く個別指導の人手が足りないということがあげられた。一斉指導のみや個別指導のみでは十分な学習の効果が得られないことから、半々の指導形態をとっている学級が最も多くなっていると考えられる。

III 検討2 知的障害特別支援学級の国語科指導における教材開発及び実践

1 目的

本研究では、知的障害特別支援学級の国語科の教材開発と指導実践を行い、知的障害特別支援学級に求められている授業改善の具体的な提案と課題を明らかにする。

2 方法

(1) 参加児童

東京都区立小学校知的障害特別支援学級児童 10 名

(2) 指導者

全3時間中、第1時を当該知的障害特別支援学級担任と筆者とのチームティーチングによって指導を行った。残りの2時間は、当該知的障害特別支援学級担任が行った。

(3) 内容

小学校学習指導要領第1学年及び第2学年の内容から、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることを目標とした指導内容を検討した。

単元名は「じゅんじょを考えて説明しよう」とし、教材には、一般図書を使用した（百木一郎「すいどう」福音館書店、2022年）。全3時間の指導計画を立て、第1時を本研究の実践とした。

（4）授業改善の視点

本研究では以下の3点の視点について授業改善・教材開発を行った。

① 指導のモデル化

知的障害特別支援学級における一般的な授業の流れをモデル化することによって、構成を明確にすることにより、要素をとらえやすくなることが期待される。図7に提案モデルを示した。

45分			
5分	15分	15分	10分
めあての確認 教材配布	音読 学習内容の読解	具体物操作 体験的な活動	本時の学習に関する 個別のプリント 他
言語活動の充実		協働的な学び	個別最適な学び

図7 一斉授業と個別の学びを取り入れた指導のモデル

② 一斉指導の中の個別最適な学び

特別支援学級における一斉指導の指導形態の中で、「個別最適な学び」を取り入れるための教材を作成した。

コミュニケーションを促進する意図的な場としても一斉指導の指導形態による学習効果は高いと考える。しかしながら、一斉指導だけでは十分な学習効果を得られない児童も多いため、一斉指導の中で、個別指導計画に基づいた課題に取り組ませるために、配布する教材文と取り組むワークシートを個別化した。教材文は同一の作品を用いてA～Cの3種類作成し、児童の学習到達度を考慮して個別に配布した。

③ 「協働的な学び」を促す活動

本実践では、スライド資料を用意し、児童が大画面モニタのタッチパネルを使って操作することで「協働的な学び」をねらいとした活動を取り入れることによって、児童の心理的な安定を図りながら、学びを充実することができるようにした。

（5）効果検証について

検討1のアンケート調査の中で実践例として紹介し、指導方法についてのフィードバックを得た。

3 結果

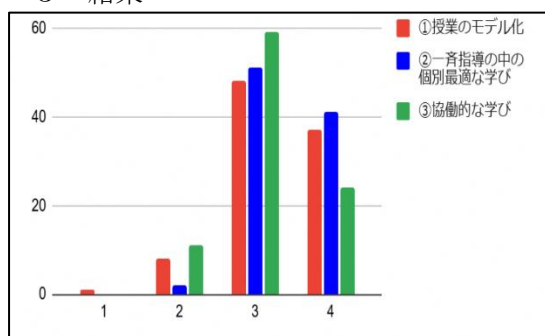


図7 実践における手だてに対する評価

表3 実践における手だてに対する評価の平均値

	平均値
①授業のモデル化	3.29
②一斉指導の中の個別最適な学び	3.41
③協働的な学び	3.14

4 考察

(1) 「①授業のモデル化」の効果と課題

「①授業のモデル化」の評価として、授業作りへのアクセシビリティのよさが挙げられた。特別支援学級担任は、初任者や特別支援教育に携わったことのない教員も多数いるため、参照できる資料として一定の効果があると評価されたと考える。一方、モデルに当てはまらない場合も多いことや、やや児童の実態が高めに設定されているという指摘もあった。

(2) 「②一斉指導の中の個別最適な学び」の効果と課題

一斉指導の中で教材やワークシートを個別化することにより、一定の学習効果があると評価を得た。一方で、4点の課題が明らかとなった。

1点目は、教員の負担感である。数種類の教科書やワークシートを準備するには、どうしても時間がかかってしまう。2点目は、教材やワークシートの支援の工夫である。今回は、使用する漢字やルビ、設問等によって個人差をつけたが、児童に適切な支援を行うには不十分であった。支援のバリエーションを増やすことで、より児童の実態に合った教材作成が可能となるだろう。3点目は、「個別最適な学び」の不足である。令和の日本型教育の中で述べられている個別最適な学びにおいては、より児童の主体性を高める工夫の必要性が明らかとなった。4点目は、一斉指導の難しさである。児童の実態差が大きく、習熟度別のグループ編成をしても一斉指導をすることが難しい場合がある。一斉指導における有効性が十分発揮されない場合は、この手だては適していないといえる。以上より、一定の効果は確認されたが、汎用性が低く負担感が大きいことが課題であるといえる。

(3) 「③協働的な学び」の効果と課題

意図的なコミュニケーションの場を設定することは、自立活動の視点からも必要な要素である。一方、児童の実態の難しさから十分な効果が得られないのではないかと課題も明らかとなった。今回の実践を更に改善し、児童同士でコミュニケーションがとられるような工夫を取り入れた活動の必要性はあると考える。

IV 全体考察

1 特別支援学級の教科指導における困難さ

本調査では、特別支援学級の教科指導において一斉指導を行うことによって一定の学習効果は得られると考えられるが、児童の実態差や教材準備等において困難さがあることが分かった。特別支援学級が小学校に設置されていることを鑑みると、特別支援学級での指導は、通常学級と全く別の特殊なものではなく、通常学級での指導の延長上に位置付けることが肝要である。国語科における教材に関しては、教科書の中でも繰り返し同じ内容を指導できるように、別の物語文がオプションとして設定されたり、ワークシートの設問がカスタマイズできたりするようなデジタル教材があると、教員の一助となるのではないだろうか。通常学級においても特別支援学級においても適用可能な自由進度学習の指導モデル等があれば、経験の多寡にかかわらず指導に当たることができるのではないだろうか。今回の調査では、特別支援学級における困難の根幹に、特別支援学級における指導実践の少なさがあると感じられた。多様な児童に直面している、教員による自助努力によって特別支援学級の指導が支えられているという点がそれぞれの困難さを助長している。

2 今後の課題

本調査では、特別支援学級における困難さの概要について明らかにすることができたが、細かな因子の特定には至らなかった。より詳細な調査をもとに、困難さについて更に明らかにしていく必要がある。また、本調査では解決へのアプローチが不足していた。特別支援学級での指導における困難さを解決していくために、デジタル教科書の活用や教材のデータベース化、児童の多様性を活用した指導モデルの提案等、現場で活用できる研究が広まることにより、特別支援学級在籍児童のよりよい学びへとつながるだろう。

VI 参考・引用文献

- 河村優詞(2018) 小学校知的障害特別支援学級の指導と授業準備の実態調査, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No. 19, 077-084
- 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申)
- 文部科学省(2022) 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議(報告)
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課(2021) 学習指導要領の趣旨の実現に向けた 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する 参考資料 (令和3年3月版)
- 文部科学省(2018) 特別支援学校学習指導要領解説 各教科編
- 文部科学省(2018) 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編
- 高阪英徳・村上理絵(2022) 知的障害特別支援学級における「各教科等を合わせた指導」と「教科別の指導」での学びをつなげる実践の在り方の検討, 特別支援教育実践センター研究紀要 第20号 33-41
- 東京都教育委員会(2021) 特別支援学級・通級による指導 教育課程編成の手引